

おじいちゃんありがとう

神奈川県 湘南白百合学園小学校六年 佐藤 二千夏

「ただいま！」

「来たかあ。よく来たなあ。」

埼玉のおじいちゃんの家に行くとおじいちゃんはいつものにこやかに迎えてくれる。私はほっとする。父が単身赴任をしているため、長期の休み以外にも週末になると私はよくおじいちゃんの家に行くのだった。

私がおじいちゃんの家に行つて必ずすることは、柱で背を測ることだ。

「背、測つてえ。」

と私が言うと、先週測つたばかりの時でも、

「よしっ。柱に背をつけてごらん。」

と横にある引き出しから三角定規とえん筆を取り出してすぐに測ってくれる。

「前回より一ミリ位のびてるぞ。」

とおじいちゃんが声をあげると、

「あら、またのびたの。良かったじゃない。」

とお母さんとおばあちゃんが口々に喜んでくれる。私が立てるようになってすぐの一歳のころから測っているから、柱の下の方からずっと上までたくさん横棒が並んでいる。この柱を見ると、私も（大きくなっているんだな。）と実感する。

おじいちゃんと私は、空いている時間があると、将棋をする。いつも私が負けてしまうけれども、

「今回は、前回より飛車で攻めることができたなあ。あと少し

で負れるところだったよ。」と毎回毎回はげましてくれて、「じゃ、もう一回やるか。」

と何回でも相手をしてくれる。だから私は将棋が強くなるように、本を買つて勉強したこともあった。

車の運転が上手なおじいちゃんは、私の誕生日のナンバークレートの車で、たくさんのおじいちゃんを連れていてくれた。

ところが、脳梗塞のせいで右足が利かなくなり、右手、左足、じん臓、心臓とじよじよにおじいちゃんの体調は悪くなつていった。そして、今年の二月に車の運転ができなくなり、とうとう入院してしまった。みんなでお見舞いに行つたときには、車いすに乗りながらも笑顔で話すおじいちゃんを見て安心した。その後、じん不全の治りようのために手術をしてとうせきの準備を進めた。しかし、おじいちゃんの血管は弱つていた。私は学校帰りに毎日お見舞いに行つた。学校からは三時間かかったけれども、全くつかれなかった。日に日におじいちゃんの容態は悪くなつていくけれども、また元気になるとしか考えなかった。

しかし、六月におじいちゃんは亡くなった。二か月以上経つた今でも信じられない。今でもおじいちゃんの家に行くとおばあちゃんの声と共に

「来たかあ。よく来たなあ。」

とうれしそうにつぶやく声が聞こえる気がする。いつも優しく接してくれたおじいちゃん。ありがとう。